

ムニャ語の口蓋垂音について＊ —東西両語における同源語の語形の比較から—

池田 巧 アグネス・コンラド 王 包包
京都大学 シドニー大学 タルトゥ大学

On Uvular Consonants: Cognate Forms in Eastern and Western Minyag

IKEDA Takumi Agnes CONRAD WANG Baobao
Kyoto University The University of Sydney University of Tartu

Summary

Eastern and Western Mu-nya (Tib. *Mi nyag*; Chin. Muya 木雅) are two related but mutually unintelligible Tibeto-Burman languages spoken in southwest China. Though still under-described, Western Mu-nya has received scholarly attention over the past decade. It is spoken by roughly 10,000 people living in Kangding 康定 County and northern Jiulong 九龍 County, Sichuan Province 四川省. Western Mu-nya has been heavily influenced by the neighboring farming dialect of Kham Tibetan. Eastern Mu-nya, on the other hand, is practically undescribed. Though no official speaker surveys have been conducted, the language is highly endangered and is no longer actively being passed on to the youngest generation. It is spoken by perhaps no more than 1,000 speakers living in western Shimian 石綿 County and eastern Jiulong County. Both dialects belong to the Qiangic diffusion area. Features considered typical of this area include directional verb prefixes, numeral classifiers, large phoneme inventories, and uvular consonants. In considering the origins of uvular consonants in the area, Huang Bufan 黄布凡 (1991) notes that uvulars may have developed from a variety of sources. The current work revisits the topic of the development of uvulars with a case study examining the historical development pathways for the uvular consonants in Western Mu-nya through comparison of cognate forms found in Eastern Mu-nya. These correspondences have important implications for both the reconstruction of Proto-Minyag, as well as for deepening understandings of development of uvular consonants in the region.

Key words: Minyag, Tibetan, uvular, velar, cognate

キーワード: ムニャ語 チベット語 口蓋垂音 軟口蓋音 同源語

＊ 本論考は、科学研究費補助金基盤研究（S）「シナ=チベット諸語の歴史的展開と言語類型地理論」（代表：池田巧, 18H05219）による研究成果の一部である。

1. はじめに

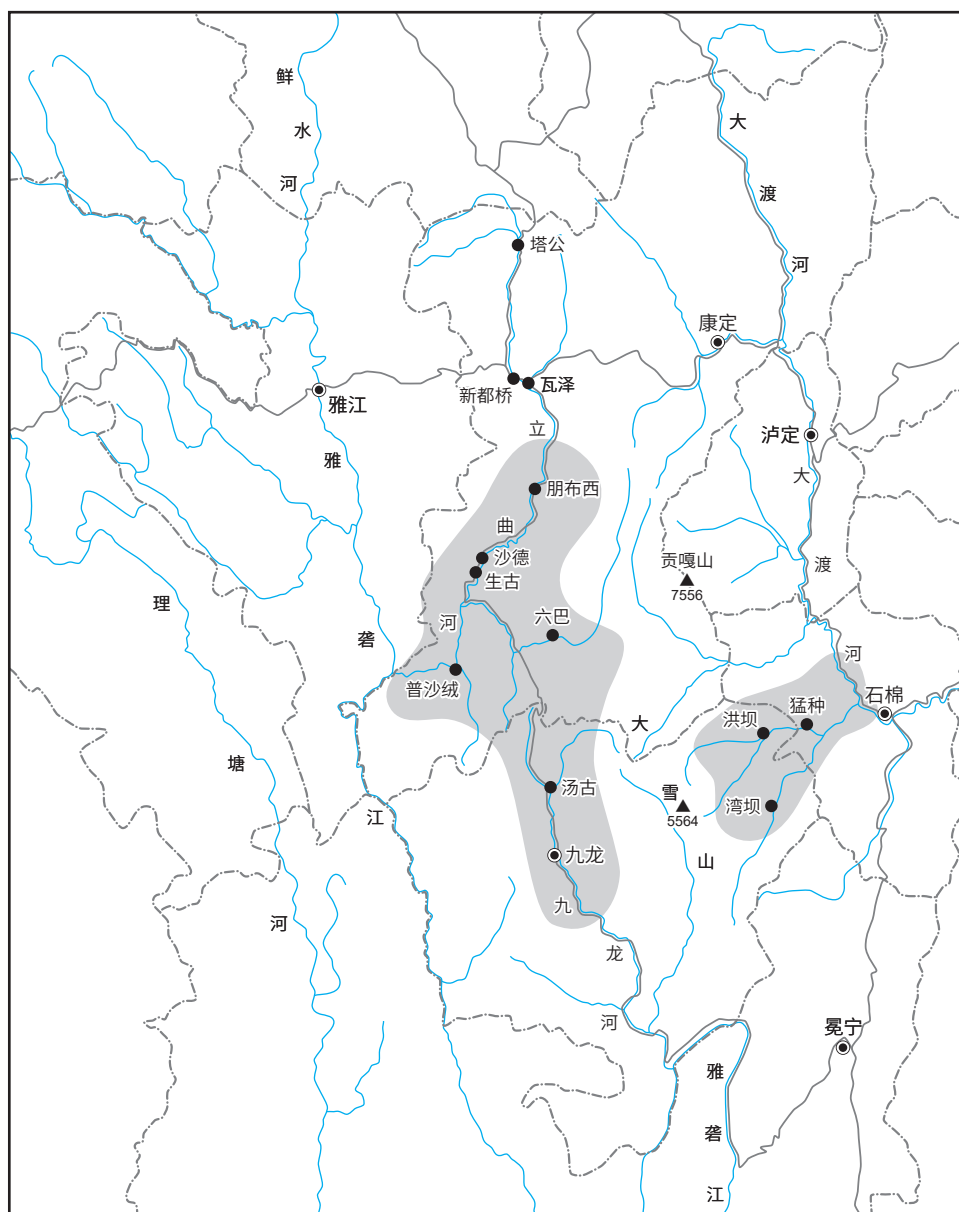
ムニャ (WrT. *Minyag*; Chin. Muya 木雅) 語は、中国西南部の名峰ミニャコンカ (WrT. *Minyag gang dkar*; Chin. Muya gongga 木雅贡嘎) の東西山麓に居住するチベット人の間で話されているチベット=ビルマ系諸語のひとつである。山脈の東西に分かれてふたつの言語 (方言) が話されているが、両者の居住地区の間には直接の交通路がない。したがって、両言語は近縁の関係にあるけれども、互いに理解しあえないほどの大きな差異がある。西部のムニャ語については、過去 20 年の間に学術的にさまざまな注目が集まり、現地調査によるデータの蓄積が急速に進んだ結果、ムニャ語の類型構造の諸側面について分析した各論と、総合的な記述文法の专著が刊行されている (Gao 2015; Bai 2019; 黄阳 2023)。

西部ムニャ語は、四川省康定県と九龙県北部に住むおよそ 1 万人の人々によって話されていて、近隣のチベット系の農耕民が話すチベット語カム方言の影響を強く受けている。いっぽう、東部ムニャ語については情報が少なく、近年まで信頼できる詳細な記述報告はなかった。公式な話者数の調査は行われていないが、この言語は絶滅の危機に瀕しており、若い世代に積極的に継承されることは、もはやないと言っていい状況にある。石綿県の西部と九龙県の東部の住民の間で使われてはいるが、話者数は 1,000 人を下回ると推測される。

どちらの言語も羌系諸語の分布域に属している。この地域に典型的な類型特徴として、動詞の方向接辞および数詞に付属する類別詞を発達させており、また、豊富な音素を区別し、なかでも口蓋垂音の存在が注目されている。黄布凡 (1991) は、地域特徴とも言うべき口蓋垂音の起源について幅広く考察した結果、羌系諸語に伝承されてきた共通特徴のひとつであると理解する孫宏开 (1991) に対して、口蓋垂音はさまざまな起源から発達した可能性があることを指摘した。

本研究では、東西両部のムニャ語の音韻対応を整理しつつ、口蓋垂音と緊喉母音に関する記述的課題を再検討し、口蓋垂音の歴史的由来と、その発達の過程について検証したい¹。

¹ 本稿は、2021 年 10 月 29 日から 31 日にかけて中国四川省成都市の西南交通大学にて開催された第 54 回国際シナ=チベット言語学会議での報告: Agnes Conrad & Wang Baobao, On Uvular Consonants: Cognate Forms in Eastern and Western Minyag をもとに大幅な改訂を加えたものである。著者三名の分担は以下のとおり。王包包は東部ムニャ語の母語話者としてデータの提供を行ない、Agnes Conrad と池田巧がそれぞれそれを記録した。東西ムニャ語のあいだでの基本データの照合から導き出された対応関係および論述の構成は、学会報告に基づいて Conrad が作成した。この草稿をもとに池田が西部ムニャ語のデータを補い、基本構成に沿って論証を行った。草稿作成時にコロナ禍が発生したため、Skype を使って議論を重ねたが、論文の骨格部分が組み立てられた段階で王はエストニアへ留学、また Conrad も研究拠点を成都からシドニーへと移したので、その後は池田が日本語で論述を補い、本稿を完成させた。よってこの日本語版については、池田が文責を負う。本論集への掲載にあたっては査読担当の専門家から重要な御指摘と御意見を賜り、修正を行うことができた。この場を借りて謝意を表したい。



カンゼチベット
地図 甘孜藏族自治州南部とムニャ語の分布域

地図上の地名表記対照

地図上に記載する地名			
チベット語 (WtT) *	簡体字	Pinyin	記号
<i>lcags zam</i>	泸定	Luding	●
<i>dar rtse mdo</i>	康定	Kangding	●
<i>wa khral</i>	瓦泽	Waze	●
<i>ra rnga kha</i>	新都桥	Xingduqiao	●
<i>lha sgang</i>	塔公	Tagong	●
<i>nyag chu rdzong</i>	雅江	Yajiang	●
<i>phungposhis</i>	朋布西	Pengbuxi	●
<i>sa bde</i>	沙德	Shade	●
<i>gser 'go</i>	生古	Shenggu	●
<i>glu pa</i>	六巴	Liuba	●
<i>dpa' sreg rong</i>	普沙绒	Pusharong	●
<i>thang mgo</i>	汤古	Tanggu	●
<i>brgad zil</i>	九龙	Jiulong	●
—	石棉	Shimian	●
—	猛种**	Mengzhong	●
<i>hung pa</i>	洪坝	Hongba	●
<i>wan pa</i>	湾坝	Wanba	●
—	冕宁	Mianning	●
<i>gans dkar ri bo</i>	贡嘎山	Gonggashan	▲
<i>gans ri</i>	大雪山	Daxueshan	▲
<i>rgyal mo rngul chu</i>	大渡河	Daduhe	
<i>gling chu</i>	立曲河	Lichuhe	
<i>brayad zil chu bo</i>	九龙河	Jiulonghe	
<i>phyag ru chu</i>	鲜水河	Xianshuihe	
<i>nyag chu</i>	雅砻江	Yalongjiang	
<i>li chu</i>	理塘河	Litanghe	

* チベット文語の綴りは、Wylie システムによるローマ字転写で示す。

** 猛種の現地名は [mundzuka] だが、チベット語ではない。中国名は現地語からの音訳であり、チベット語の *grong* 「村」とは関係がない。語源は、*mu* 「空」+ *ndzu* 「牧草地」か、*mu* 「空」+ *ndzu* 「ある」に由来する可能性がある。*ka* は現地の村の名前によく見られる形態素で、古くに使われていた位置標識（「～地」の意）であろう。同村出身の王包包によれば、民国時代にはこのあたりの標高までヤクを飼っていたので、*Maoniuga* 牦牛岬とも呼ばれていた。清代の文献では現在の名称である *Mengzhong* 猛種の第二音節の *zhong* [種] が、しばしば異なる漢字で表記されていることがある。

2. 音素一覧

西部ムニャ語と東部ムニャ語の比較を容易にするため、両言語の音素を調音部位順に並べ、対照して示しておく。環境による異音かとも考えられるが、出現頻度が高く弁別的な音声は[]で囲んでおいた。またムニャ語の音調は、音節に固定したピッチを有する声調ではなく、高低のピッチパターンが緩やかに単語に被さっている音節高さアクセントである²。

表1 音素一覧

西部ムニャ語							東部ムニャ語						
子音							子音						
p	p ^h	b	mb			m	p	p ^h	b	mb	[B]		m
		v				w		f	v			w	
ts	ts ^h	dz	ndz	s	z		ts	ts ^h	dz	ndz	s	z	
t	t ^h	d	nd			n	t	t ^h	d	nd			n
						l							l
tʂ	tʂ ^h	dz̥	ndz̥	ʂ	[z̥]								
					r								
tɕ	tɕ ^h	dʒ	ndʒ	ɕ	ʒ	ɳ	tɕ	tɕ ^h	dʒ	ndʒ	ɕ	ʒ	ɳ
					j							j	
k	k ^h	g	ŋg	x	ɣ	ŋ	k	k ^h	g	ŋg	x	[ɣ]	ŋ
q	q ^h		ŋg	[χ]	ʁ	N	[q]	[q ^h]		[ŋg]			[N]
[ʔ]				[h]	[ɦ]						[h]	[ɦ]	
母音							母音						
	i	y				u	i / i̯	[y]					u
	e	ø			ʊ	o	e		[i / i̯]		ʊ / ʊ̯		
				[ə]			[ɛ]		ɤ / ɤ̯		[ɔ̞]	ɔ̞	
	æ		e		[ʌ]		*æ		e				
	[a]				[ɑ]			a					*ɑ

² 西部ムニャ語のピッチアクセントの基本的な性質については Ikeda (2002) を参照。語によって有限個の音調タイプのいずれかが選択されるという類型なので「語声調」と分析できる余地があるけれども、語ごとにいつでも決まった音調タイプをとる、とまでは言えない。語と音調の結びつきは緩やかで自由度が高いため、それを声調として記述しようとした中国の研究者による先行研究では、かなりの混乱が生じている。なお本稿で取り上げる問題にアクセントは直接関与しないので、必要がある場合を除き、表示上の煩を避けて省略した。

 アクセント (音節高さアクセント)

1 音節語

˦S [S ⁵⁵ / ⁵³]	高	(有標) 音節の始まりが高い
S [S ³⁵ / ³³]	低	(無標) 音節の始まりが低い

2 音節語

˦S ˦S [S ⁵⁵ S ⁵⁵]	高高	(S S [S ³³ S ³³] 低低 ³)
˦S S [S ⁵⁵ S ³³]	高低	S ˦S [S ³³ S ⁵⁵] 低高

西部ムニャ語のデータは, Liqu 立曲/立啓 河沿いに北から Pengbuxi 朋布西, Shenggu 生古, Liuba 六巴, やや西の Pusharong 普沙绒, および南の九龙県に降った Tanggu 汤古の各地点での調査に基づく。村落間で見られる変異は, 調査データの分析成果の範囲内に組み込んでいるが, 特定の地点における特徴には適宜注記あるいは説明を附した⁴。Tanggu 汤古村の共時的な母音体系では, 出現頻度から言えば [æ] は /a/ の自由変異として現れ, [ʌ] は /e/ の異音として現れる。しかし他の地点のデータとの比較から [ʌ] は起源的に緊喉母音から派生したと考えられる音であり, [a] と /ɯ/ についても同様の関係にあることがわかってきた。この並行性に着目すると, [a] も起源的には [æ] の緊喉母音から派生した音である可能性が高い。しかし実際の出現頻度は [a] のほうが [æ] より多く, [e] は [ʌ ~ ɑ] よりも頻出し, [ɯ] は [a] よりも多く聞かれる。下位方言や個人での状況にもばらつきがある。単独の方言だけを記述しようとする, どちらを基本的な音素と認めて, どちらをその異音と扱うべきかについては判断に迷うところである。上の一覧には方言地点間の対応や歴史的な変化などを考慮した分析結果を体系化して示している。

西部ムニャ語においては, 緊喉音の出現は散発的で不安定であり, いずれの地点, どの世代でも一致をみるような安定した再現性は認められない。それゆえ各地点のデータにおいては, 記録時の音声実現形を記すことを原則とした。また西

³ 助動詞・助詞・述詞などの単語連続には, 低低という連続が聞かれることがあるけれども, 西部ムニャ語においては2音節語の内部に有標のアクセント核のない*低低の組合せは存在しない。いっぽう東部ムニャ語ではごく少数ながら低低の固定ピッチを有する2音節語が存在する。また単音節語や語末において時に35のような上昇ピッチや53のような下降ピッチが現れることがあるが, 上昇下降のピッチ移行に有意の弁別性があるわけではなく, 自然な発話では*昇昇あるいは*降降の組合せの語も聞かれない。アクセントの識別における有標性は「音節の始まりのピッチが高い」ことにある。

⁴ いずれも池田が1995年から2015年頃まで断続的に現地の各地点で記録したデータに基づく。発話協力者は, 生古と湯古は現地在住の当時50代男性, 朋布西と六巴は20代男性。また朋布西と普沙绒はConradが収集した青年から中年の女性話者のデータを使用した。池田の観察では, 男女間の差異はきわめて小さく, 世代間と地点間では異なる特徴が見られることもあった。こうしたデータ間の差異や特徴については, 議論に関係する場合にのみ注記をしている。

部ムニャ語の音素一覧からは鼻母音は除外してある。漢語およびチベット語からの借用語を除くと、通常の母音と鼻母音との対立語例はこれまで見つかっていない。後続する音節の初頭子音が鼻音または前鼻音の場合に、逆行同化による前音節の鼻母音化が普遍的に見られ、すべての母音が環境により鼻母音化し得るからである。

東西両言語のどちらの音素一覧にも含まれていないのは、初期の研究では二重母音として分析されていた要素である（西部ムニャ語については孫宏开（1983）および黄布凡（1985）を、東部ムニャ語については孫宏开（2016）を参照）。これらの「二重母音」のうち主母音の前に現れる要素は、本稿では音節初頭子音と母音を繋ぐ介音（glide）として理解される。[-i-] および [-y-] 介音は中国語からの借用語にのみ現れ、[-w-] 介音は Tanggu 汤古村では口蓋音あるいは口蓋垂音の後にしか現れず、Shenggu 生古村ではこれらの介音はいずれも存在しない。

現在までのところ、東部ムニャ語の音韻体系についての言語学的な記述報告は公開されておらず、出版もされていない⁵。あるのは、孫宏开（2016）および孫宏开等（主编）（2017）に発表された単語リストの記述に使われた音形の記録だけで、どちらにも音韻体系の説明などはいっさい付けられていない。本稿で提示する東部ムニャ語のデータは、東部ムニャ語の分布地域でもその東端に位置する Mengzhong 猛种村で話される音声を反映しており、データは共著者の王包包が提供したものに基づく。

東部ムニャ語では、緊喉母音の現れ得る母音は / で区切り、下線を付した緊喉母音を添えてある。また東部ムニャ語では、年長者における /a/ : /ɑ/ の区別が、若い世代では /æ/ : /a/ の区別に近づく傾向がある（表中の * 印の母音）。こうした東部ムニャ語の内部における音声変異の範囲についてはほとんど知られていないが、予備的な現地調査の結果、村落および世代ごとに西部ムニャ語よりもかなり大きな変異があることが観察された。

なお、東部ムニャ語に見られる r 化母音（および口蓋垂 $\mathfrak{r}$ 化母音）の音素については議論の余地がある。r 化母音は、後続する音節 */-li/ または */-r/ のような音節末子音が母音に r 化の音声的特徴を付与する過程から生じたと考えられる。同様に、口蓋垂 $\mathfrak{r}$ 化母音 [ɔ^ɾ] は、*/ɔwɔ/ という音連続から /-wɔ/ という音節が失われたために生じたと考えられる（この形態変化の詳細については、本稿で扱う問題の範囲を越えるため、別稿を準備中）。

⁵ 最近出版された赵丽明（主编）（2023）に、刘楚龙、黄腾宇（2023）蟹螺乡木雅语语言概况. および张琰、刘楚龙、黄腾宇（2023）木雅语东西部方言语音特点初步对比. が掲載された。東部ムニャ語のデータは、本稿と同じ猛种村出身の話し手からの提供であるが、音素の体系に反舌音の系列があるなど、世代差を示すと見られるわずかな差異が観察される（入稿に際して追記）。

3. 口蓋垂音概観

羌系諸語に特徴的な子音である口蓋垂音は、西部ムニャ語においてもよく使われる音で、基礎語彙を含む語彙全般にわたり頻繁に出現する。

表2 西部ムニャ語における口蓋垂音が現れる語例

	Pengbuxi 朋布西	Shenggu 生古	Liuba 六巴	Tanggu 汤古	語義
/q-/	ˈqa ˈrɿ	ˈqa ˈrɿ	ˈqe ˈre	qa ˈre	「近い」
/qh-/	ˈqʰa ˈqʰa [形]	tə- ˈqʰa	tə- ˈqʰa	tə- ˈqʰɿ	「苦い」 ⁶
/ŋg-/	ŋga ˈŋga	ŋgɿ ˈŋga	ŋgua ˈŋgua	ŋgwɛ ˈŋgwɛ	「硬い」
/n-/	ˈna ˈli	ˈna (ˈlɔ)	ˈna (ˈlɔ)	ˈna (ˈlɔ)	「5」 ⁷
/ɸ-/	ˈɸa lɔ	ɸɛ ˈlɔ	ˈɸɛ lɔ	ɸɛ ˈlɔ	「頭」

音節初頭子音の口蓋垂音の系列 /q-/ /qh-/ /ŋg-/ /n-/ および摩擦音の /ɸ-/ は、西部ムニャ語の下位方言群のいずれにおいても聞かれる安定した音素である。いっぽうで、口蓋垂音の系列には、困惑する状況もある。それはときどき口蓋垂音が「語に固定された音」ではなく、軟口蓋音の「環境異音」や「自由異音」のようにふるまう場合があるためである。とくに無声口蓋垂摩擦音 [χ-] に始まる音節を含む単語は、しばしば軟口蓋音 [x-] あるいは声門音 [h-] で発音されることがある。それゆえ [χ-] は独立した音素ではなく、軟口蓋音 /x-/ の自由変異音である可能性が高い。また、鼻音音素 /n/ も、しばしば [n- ~ ŋ-] のように軟口蓋音で発音されることがある。この口蓋垂音の音節初頭子音の系列には、鼻音化のない有声閉鎖音の */g-/ が缺けていることが注目される。

ここで西部ムニャ語の口蓋垂音に関する現在までの理解を簡単にまとめておこう。これまでの研究では、西部ムニャ語の口蓋垂音系列は、共時的に軟口蓋音の環境異音から派生した音素として認識されてきた。西部ムニャ語では、口蓋垂音の系列には閉鎖音、鼻音、鼻化閉鎖音、摩擦音があり、/k-q, kʰ-qʰ, g(-g), ŋ-n, ŋg-ŋg, x-χ, ɸ-ɸ/ のように、それぞれ調音位置の前後により、軟口蓋音との間にきれいな対応関係が成立する。

ただし前鼻音化のない有声閉鎖音 [g] だけが独立して出現する確実な語例は現在のところ見つからない。孫宏开 (1983: 165/2013: 166) は、/q- qʰ-/ を音素として数えるとともに、有声口蓋垂閉鎖音 /g-/ の語例として [ɡu³⁵tɔ³⁵] 「持つ／持っている」を挙げているが、この一語だけに基づいて /g-/ を独立した音素

⁶ tə- は、動詞方向接辞で「上へ」を意味する。

⁷ li ~ lɔ は、汎用の類別詞 (量詞)。

として扱うことができるか否かは疑問である⁸。黄布凡（1985:62 / 2009:20）は、[g-] は単独では音節初頭子音にはなれず、[n] と結合して複合子音音素 /ng-/ を形成する、と指摘している。あわせて声門閉鎖音 [ʔ-] は、母音で始まる単語の前にのみ現れるため、この2つの子音は音節初頭子音の音素として数に含めていない。また、軟口蓋音系列の子音は普通母音と、口蓋垂音系列の子音は緊喉母音と結合して相補分布をなすが、[ŋ-] と [ɣ] を除き、どちらの子音系列も母音 o の前に現れ得ることを発見した。それゆえ黄布凡は、口蓋垂音系列の子音を独立した音素として扱ったのである。

いっぽう、Gao（2016: 71–75）は、口蓋垂音は RTR 母音（Rétraction de la racine de la langue [舌根部の後退＝咽頭化]：本稿の緊喉母音に相当）の前にのみ出現し、硬口蓋音は非 RTR 母音とともに出現することを指摘したうえで、すべての口蓋垂音を対応する硬口蓋音の異音とみなしている。また Bai（2019; 2021）は、口蓋垂音が音素と認定され得るか、あるいは異音にすぎないかといった音韻体系における位置づけの違いは、北部と南部の地域差に起因するとしている。

東部ムニャ語には、口蓋垂音化した母音 /ɔ̃/ があるほか、軟口蓋の閉鎖音や鼻音に対応する口蓋垂音が、ときに自由変異音として現れることがある。ただし注意すべきは、東部ムニャ語においては、口蓋垂音は、西部ムニャ語のようには安定して発音されないことである。無声軟口蓋摩擦音 /x-/ はかなりまれにしか使われず、それに対応する口蓋垂摩擦音 [χ-] が異音として含まれる語例はまだ見つかっていない。西部ムニャ語とは異なり、東部ムニャ語には口蓋垂有声摩擦音の *[ɞ-] は聞かれない。対応する軟口蓋有声摩擦音 [ɣ-] は、現在まで収集したデータのなかには [ndo ɣoɣo] 「凹んだ」の1語があるのみである。これはチベット語からの借用語の可能性がある。とすると、この語に含まれる [ɣ] は、西部ムニャ語に受け入れられたのち、連続する母音 [o] に挟まれた環境で閉鎖が弱化して有声化したために、西部ムニャ語の内部では音素 /g/ の異音となって定着した音であろうと推測される（<WrT. kong kong>）。

上述したように、ほとんどの先行研究で、西部ムニャ語の口蓋垂音は、いずれも緊喉母音もしくは奥舌母音との組み合わせにおいて現れ、軟口蓋音と相補分布をなす異音であると考えられている。この分析は共時的分析として適切であり、西部ムニャ語と東部ムニャ語といずれにおいても、軟口蓋音とペアになる口蓋垂閉鎖音および鼻音があり、それらが東西両部の方言間でうまく対応するという事実によっても支持される。

ところが、この理論では、軟口蓋有声摩擦音 [ɣ] と口蓋垂有声摩擦音 [ɞ] の関

⁸ 孙宏开（1983: 165 および 2013: 166）の挙げる語例 [gw³⁵tɕ³⁵] ‘拿着’ は、記録不備の可能性が高い。生古村および湯古村出身の話者に確認したところ、この語例に相当するのは、[ŋgɔ³³- tɕ⁵⁵] 「持ってくる；引く張る」（生古村）；[ŋgw³³- tɕ⁵⁵] 「同（二人称主語／命令形）」（湯古村）ではないかとの意見であった。だとすると [ŋgɔ³³-/ŋgw³³-] は、動詞の方向接辞で、動作が話し手自身に向かう方向であることを示すものであり、必ず前鼻音化する。この方向前接辞は、動詞語幹が緊喉母音の場合にはそれに同化して [ngw-] となることがある。

係を十分に説明できない。詳細に観察してみるなら、閉鎖音や鼻音とは異なり、有声摩擦音においては、軟口蓋音と口蓋垂音 /ɣ - ʁ/ の対応関係とその音声的な出現条件が明確ではない。東西両部のムニャ語における同源語を比較してみると、そこには /ɣ-/ (西部) : /d-/ (東部) および /ʁ-/ (西部) : /w-/ (東部) という規則的な対応関係が見られるのである。

4. 口蓋垂音：閉鎖音と鼻音

口蓋垂閉鎖音と口蓋垂鼻音が、[緊喉母音に由来する] 奥舌母音が後続する環境条件で発せられる軟口蓋音素の異音であるという、現在広く受け入れられている考えかたを覆す証拠は少ない。にもかかわらず、口蓋垂閉鎖音と口蓋垂鼻音を独立した音素として立てる理由は以下の2点に集約される：

- (1) 表1に挙げた単語をはじめとして、/qø/「小麦」などの名詞や、動詞につく方向前接辞 {k^hV-} が単語によって例えば /q^ho-ko/「助ける」のように、固定的に /q^hV-/ として現れることがある。
- (2) 少ないながらも方言地点によっては軟口蓋音と口蓋垂音との間で最小対立を示す語例がある。例えば、湯古方言には、/na/「金」: /ŋa/「鼓」あるいは /gũ³³ndzũ⁵⁵/「ブドウ」: /qũ³³ndzũ⁵⁵/「ニンニク」といった例がある。

しかしながら、西部ムニャ語においては、口蓋垂閉鎖音 /q, q^h/ と口蓋垂鼻音 /N/ および前鼻有声音 /ŋG/ と、それらに対応する軟口蓋音とのあいだで区別される対立語例を見つけるのは、実際には容易ではない。

ここでは、さらに口蓋垂閉鎖音と口蓋垂鼻音の歴史的な発達について、その出現を条件づける母音に注目して検討を深めることにより、2点ほど補足的な提案をしたい。

- A. 口蓋垂閉鎖音の出現は、円唇化した軟口蓋音に関連する。
- B. 口蓋垂閉鎖音と鼻音を含む西部ムニャ語の単語の一部には、チベット文語で [軟口蓋音 - 母音 - 軟口蓋音] の音節構造を持つ語との対応が見られ、それらは借用語と考えられる。

以下ではこの2点について検証を試みる。

4.1 軟口蓋音の円唇化

表3を見ると、西部ムニャ語に現れる口蓋垂閉鎖音 /q, q^h/、鼻音 /N/、および前鼻化有声音 /ŋG/ は、東部ムニャ語の軟口蓋音 /k, k^h, ŋ, ŋG/ および環境により異音として現れる口蓋垂音によく対応していることがわかる。

表3 西部ムニャ語の口蓋垂閉鎖音鼻音と東部ムニャ語との対応

西部ムニャ語	東部ムニャ語	語義
qa rɬ	ka la	「近い」
q ^h a q ^h a	ti- q ^h a	「苦い」
na	ŋa	「金」
t ^h a- qa	t ^h ɬ- kwa	「恐れる」
q ^h a q ^h a	na- k ^h wa	「痩せた」
na = lø	ŋwa = li	「5」 ⁹

後半の3例に注目すると、西部ムニャ語の口蓋垂音に、東部ムニャ語では円唇化を伴う軟口蓋音が対応することを示している。東部ムニャ語では、円唇化は前節で挙げたすべての音節初頭子音の音素に付随して現れ得る。母音との関連では、我々のデータで見る限り、低母音 /æ/ もしくは /a/ との組み合わせ（年長者では /a/ : /ɑ/）においてのみ出現する。

なお子音の円唇化は西部ムニャ語においても観察されるが、西部ムニャ語の中でも比較的保守的な南部と西部の地点では顕著に見られるものの、中央地域の Shade 沙徳から北部にかけての地域では、円唇化がいっさい観察されない。また円唇化が残る地域でも出現する環境が限られており、次の表4に示すように、主として軟口蓋子音との組合せにおいてのみ現れる。

表4 西部ムニャ語の各地点における軟口蓋音と円唇化

北部地点 Pengbuxi 朋布西	中央地点 Shenggu 生古	西部地点 Pusharong 普沙绒	南部地点 Tanggu 汤古	語義
ki	ki	kwi	kwi	「年」
k ^h i	k ^h i	k ^h we	k ^h wi	「弟」
ŋgæ-mi	ŋga-mi	ŋgwæ-mi	ŋgwa-mi	「狩人」
ɣi	ɣi	ɣwi	ɣwi	「馬」

⁹ 数詞の5については、Coblin (1986) によるチベット=ビルマ祖語 (PTB) の再構形が **Ingay であることは、以下の議論にも関係していて興味深い。音節末の有声摩擦軟口蓋音 ɣ は、ビルマ語の声調の調類との対応から推定された要素である。しかしここでもし、チベット語カム方言のように、ムニャ語においても歴史的に早い段階で音節末に口蓋音の存在を仮定し、その影響で母音が奥舌化して、音節初頭の軟口蓋子音が口蓋垂音化するのを促したと考えるなら、「金」「5」の両語の母音が、東西両部のムニャ語において、いずれも奥舌母音ではなく前舌母音の /a/ であることはその反証になるだろう。この口蓋垂鼻音と前舌母音との組合せの問題についての分析は後述する。

1980年代に初めてムニャ語が言語学的に記述された初期の段階においては、孫宏开(1983)と黄布凡(1985)は、これらを二重母音韻母として分析しており、同時に現在知られている各方言の状況よりも、軟口蓋音以外の子音・母音の組合せに幅広く円唇化が現れていたらしいことを報告している。例えば、黄布凡(1985: 62–64)には「介音 u の前の子音は円唇化子音であり、/ts^huə/「肺」は実際には [ts^hwə⁵³] と発音される」という指摘があるほか、軟口蓋音・口蓋垂音の円唇化語例とともに /tɕuə²⁴/「蟻」など、破擦音に円唇化が現れる固有語の例をいくつか挙げていて興味深い。孫宏开(1983)の記述にも軟口蓋音の他にも破擦音に円唇化が現れる固有語の例が含まれてはいるが、記述のしかたに漢語からのバイアスが強く、二重母音の例に少なからぬ漢語からの借用語を含めているため、注意が必要である。ムニャ語の [-w-] は円唇化した音節初頭子音と主母音との間に現れる渡音であって、漢語のように介音と主母音の組合せが固定化した二重母音ではない。湯古方言では、円唇化は軟口蓋音子音に付随して現れ、生古や朋布西では、この渡音 *-w- は消失している。

これらの同源語と西部ムニャ語における円唇化の分布状況から考えると、軟口蓋音の唇音化は、母音の後退／下降を促す調音環境を形成し、口蓋垂音の出現に有利な条件を提供したと推定される。この結果、表3の「恐れる」「瘦せた」「5」の3語に関して言えば、西部ムニャ語では母音 /a/ が発生し¹⁰、それとともに西部ムニャ語ではどの下位方言においても、この母音に接続する唇音化した軟口蓋音 /kw-/ の形が失われ、口蓋垂音 /q-/ に取って代わられたと考えることができる。いっぽうで表4が示すように、軟口蓋音＋唇音化は、/i/ のような高舌母音には影響を及ぼしておらず、口蓋垂音の発生にも関係しないように観察されるが、この唇音化した軟口蓋音と口蓋垂音との関係は、次の章で取り上げる摩擦音の議論にも深く関連するため、さらに研究を進める必要がある。

4.2 チベット語からの借用語

西部ムニャ語において、口蓋垂閉鎖音および口蓋垂鼻音を含む単語の一部には、チベット文語で軟口蓋音－母音－軟口蓋音の音節構造を持つ語との対応が見られ、両者が同源語あるいは借用語であることを示唆する例がある。

¹⁰ 池田の観察では、母音 [a] は [ʌ] と対立しない。緊喉音に由来する母音 [ʌ] を有する音節に、アクセントあるいはイントネーションが加わったことにより、奥舌でより明瞭な響きを持つ母音 [a] が実現されるようになったものと考えられる。後述する4.3 緊喉母音の議論を参照。

表5 チベット語カム方言との対応

北部地点 Pengbuxi 朋布西	南部地点 Tanggu 汤古	チベット文語 <i>bod yig</i> 藏文	チベット語カム方言 <i>ra rnga kha</i> 新都橋	語義
nɔ- qa	nu- kɛ	<i>bkag</i>	ka	「遮る」
tsø q ^h a	tsõ q ^h õ	<i>btson khang</i>	tsõ k ^h õ	「刑務所」
ɔ / ŋɑ	—	<i>ngang</i>	ə / ŋɑ pa	「鵝鳥」

表5の単語のうち「刑務所」は近現代の借用語である可能性が高い。この単語には、西部ムニャ語だけでなく、隣接する農耕民が話すチベット語の新都橋方言においても口蓋垂音が聞かれることがある¹¹。

西部ムニャ語に隣接し、ムニャ語の話者にも話し手が多いチベット語カム方言では、音節末尾音 *k または *ŋ (チベット文語で -ག -g / -ང -ng に対応) に先行する母音 /a/ が奥舌化する傾向が顕著である。加えてその母音の前に音節初頭子音として軟口蓋閉鎖音がある場合、たとえば /ka ri/[qa ri] 「雪山」(WrT: *gangs ri*) や /k^hɔ pa/[q^hɔ pa] 「体」(WrT: *khog pa*) のように、頭子音は口蓋垂音として実現することがある。

現地のチベット語方言では、軟口蓋の音節末子音の消失に伴い、低母音の音色にその区別が移行したと考えられる。

-ab *[-ɛp] : -ag *[-ak] > /-a/ [-ɛ?] : /-a/ [-a?]

-an *[-ɛn] : -ang *[-aŋ] > /-an/ [-ɛ̃] : /-an/ [-ã]

この変化は、音節初頭子音の種類に関係なく発生した。例えば、/ˈmami/ 「兵士」(WrT: *mag mi*)、/tɕa/ 「鉄」(WrT: *lcags*) を参照。同時に、音節末に軟口蓋音韻尾を持たない音節では、/a/ が奥舌化して [a] に移ることはなかった。例えば /ˈmaŋa/ 「バターの箱」(WrT: *mar sgam*) を参照。さらには /tɕ^hewa/ 「数珠」(WrT: *phreng wa*) のように、たとえ軟口蓋音韻尾が接続しても、高母音や前舌母音では、その調音位置に大きな影響を与えていない。音節初頭子音が軟口蓋音で、それに低母音 + 軟口蓋音節末子音の組合せが接続する音節では、音声環境的にこの母音変化がより起こりやすかったと考えられる。注意すべきは、チベット語カム方言の場合には、母音が奥舌化したことによって音節初頭子音がそれに影響されて口蓋垂音化することはあり得ても、軟口蓋初頭子音がさきに口蓋垂音化していて、それが母音の奥舌化を促したのではない、ということである。

表5の「遮る」と「鵝鳥」は、いずれも対応するチベット文語を見ると音節

¹¹ 新都橋のチベット語カム方言のデータは池田の調査記録による。発話協力者は30代男性。池田の観察では、チベット語新都橋方言において奥舌低母音 /a/ [a~ɔ] の前で、軟口蓋初頭子音 /k-, kh-/ の自由変異音として口蓋垂音 [q-, qh-] が聞かれる場合がある。

末に軟口蓋音があり、口語音では低母音が奥舌化するとともに音節末音が弱化して開音節となっている。朋布西と新都橋の「鵝鳥」には二つの語形が記されているが、[ɔ] (ムニャ語：朋布西) および [ə] (チベット語：新都橋) は、いずれも漢語の‘鵝’からの借用語であり、ムニャ語の [ŋɡɑ] (朋布西) は、チベット語 *ngang (pa)* からの借用語であろう。ただし [ŋã pa] (チベット語：新都橋) は、厳密には家畜のガチョウではなく野生の「雁」を指している。いっぽう、「遮る」はムニャ語の固有語なのか、チベット語からの借用語に方向接辞がついて固有語化したものか、俄かには判断し難い。

この音声変化から音韻化へのプロセスは、隣接するチベット語カム方言の中で働いているメカニズムであるが、カム方言から少なくない借用語を有する西部ムニャ語では、こうした原語における変化の出力がそのまま借用された可能性が高い。それが可能だったのは、ムニャ語の内部においても口蓋垂音の音素化が独自に進行していて、受け入れる素地がすでに形成されていたからに他ならない。たとえ口蓋垂音の系列がまだ体系として音素化していない段階にあっても、すでに区別される音声として存在していたのであろう。

このように理解することで、これまでの研究が指摘してきたように、西部ムニャ語には前鼻音化のない有声閉鎖音 *[g] が、単独で軟口蓋音 /g/ の異音としては存在しない理由の一端¹²を説明できる。現地のチベット語方言では、語頭において「対応するチベット文語の綴りに」子音連続がない場合には有声音 g- に由来する音も無声化して低声調の [ḡ-] で発音される。それゆえ、たとえ後続する奥舌母音に影響されても有声閉鎖音の *[g-] が生じることなく、無声音の /k-/ [k- ~ q-] に合流してしまう。よって「値段」は *gon ではなく /kon/ [kõ ~ qõ] (WrT: *gong*) となる。この語は西部ムニャ語に借用されているが、口蓋垂音ではなく軟口蓋音で受け入れている：/ko/ [ko ~ kō] 「値段」。同様の例には /kontʰɑ/ (WrT: *gong thag*) 「襟」があり、こちらはムニャ語では口蓋垂音で受け入れて [qɒntʰɑ] と発音されているが、やはり無声音であって *[gɒntʰɑ] とはならなかった¹³。

こうしたチベット語カム方言に生じた音声変化をヒントに考えると、ムニャ語においても、チベット語からの借用語と同様のメカニズムが働き、歴史上の早い段階において「現在では失われた音節末尾音」の存在を仮定して、その影響で発達した低舌／奥舌母音が作用して軟口蓋音の調音位置を奥寄りに引き寄せ、軟口蓋音の音節初頭子音の異音として口蓋垂音が発生したという可能性も想定できそうである。しかしながら、現在までに知られるムニャ語のデータからは、奥舌母音の発生につながる音節末子音がかつて存在したことを示唆する証拠は何もな

¹²ここではムニャ語の体系の隙間を埋められそうなチベット語からの借用語が、なぜそこうまくあてはまることがなかったのかについて論じている。ムニャ語の音韻体系に口蓋垂有声閉鎖音の *[g] が欠けている理由については後半で検証する。

¹³後者を口蓋垂音で受け入れているのは、2音節語で後続する音節もともに奥舌母音であることが影響しているものと考えられる。

い。それゆえ現状ではこの想定は証拠を欠き可能性の指摘の域を出ない。

以上をまとめると、西部ムニャ語の軟口蓋閉鎖音と鼻音の出現については、その一部に、奥舌母音の /ɑ/ と /o/ [o ~ ɔ] によって条件付けられたと説明できるものがある。これらの奥舌母音は、比較的新しい時代のチベット語カム方言からの借用語に見られる。カム方言においては、これらの奥舌母音は音節末の軟口蓋閉鎖音と鼻音が失われる代償として出現したことが判明している。これらの奥舌母音は借用語中に保たれていて、ムニャ語の母音体系にも組み込まれて定着していると言つてよい。

しかし、ムニャ語の固有語にあっては、同じようにかつて音節末に軟口蓋閉鎖音と鼻音が存在し、それが失われた代償として奥舌母音が出現した可能性を単に類推することはできない。なぜなら、ムニャ語にかつて音節末閉鎖子音が存在したと推定できる根拠はないからである¹⁴。

4.3 緊喉母音

いっぽうでムニャの固有語において奥舌母音が発生した条件は、まだよくわかっていないところがある。ここでは、緊喉母音との関連において母音の奥舌化と口蓋垂音の発生の問題を検討してみたい。

西部ムニャ語の下位方言のいずれにおいても、しばしば緊喉母音が聞かれることがあるのだが、調査者を困惑させる現状がある。

- (1) 緊喉母音が普通母音との対立において明白な体系をなしているわけではない。
- (2) 緊喉母音と普通母音との間で最小対立語例を見つけるのは難しい。
- (3) 緊喉母音の出現はかなり不安定で、確実な再現性が見られない。下位方言の間でも対応関係がはっきりしない。
- (4) 方言地点や世代、個人により緊喉の程度が異なる。軋み音 (creaky voice) に近い特徴的で顕著な音が聞かれる場合もあれば、舌根を咽頭に接近させる軽度な咽頭化が観察される程度の場合もある。

それゆえ、2. 音素一覧 では、西部ムニャ語の母音の一覧には、緊喉母音を表示していないが、異音として示した [ə] [a] [ʌ] [ɑ] は、いずれも緊喉音から派生したと考えられる母音である。いっぽう東部ムニャ語では、緊喉母音は限定的であるとともに、西部ムニャ語よりも安定して現れるため、対応する普通母音の後に / で区切って示し、母音の体系のなかに組み込んでおいた。

孫宏开 (1983: 165) は「緊喉母音は e a u の三種類、…緊喉母音の発音はあまり安定しておらず、緊喉母音を含む語であっても、文中においては喉頭の筋肉が緊張する発音特徴が失われることがある。」と述べており、池田の観察も基本的にこれに一致する。

¹⁴ 脚注 9 を参照。

黄布凡 (1985:63 / 2009:22) は、緊喉母音の記述はかなり詳細である。まず、緊喉母音として /i̥, e̥, ø̥, ḁ, ə̥, ɐ̥, ɑ̥, o̥/ の 8 種類を挙げ、それについて以下のような説明を加えている (途中の項目 3 ~ 6 は、子音についての説明なので省略)。

1. i̥/i̥, e̥/e̥, ø̥/ø̥, æ̥/ḁ, ə̥/ə̥, ɐ̥/ɐ̥ この 6 対の母音は、弛緩と緊張の違いのほかに、舌位の高低と前後にわずかながら違いがある。前者 4 対の緊喉母音の舌位は普通母音よりもやや低めであり、ə̥ は概ね IPA の [ə] に相当し、ɐ̥ は ə̥ よりもやや低くて奥よりである。ɐ̥ は e̥ よりも奥よりで IPA の [ʌ] に相当する。
2. y, u, ɑ̥, o̥ は、音声学的特徴からは普通母音であるけれども、語構成と形態変化を観察すると、y, u はいつでも普通母音とともに現れ、ɑ̥ は常に緊喉母音とともに現れる。o̥ は普通母音ばかりでなく、緊喉母音とともに現れることのほうが多い。それゆえ、y, u を普通母音に、ɑ̥, o̥ を緊喉母音の系列に含めている。

.....

7. 緊喉母音の i̥, e̥, ø̥ は、語中ではあまり見られず、主に形態変化において現れる。

以上の説明から、黄布凡が 7 で指摘する形態変化により現れる緊喉母音の i̥, e̥, ø̥ を除外して整理すると、西部ムニャ語の豊富な母音の派生関係は、以下のように整理できる ([ḁ] と [o̥] については後述)。

普通母音		[+緊喉化]		緊喉由来母音
/ɯ/ ¹⁵	→	[ɯ̥ ~ ɐ̥]	>	[ə̥]
/æ/	→	[æ̥ ~ ɑ̥]	>	[ḁ]
/e/	→	[e̥ ~ ʌ̥]	>	[ʌ̥]

西部ムニャ語の緊喉母音は、上の世代で保守的な音韻体系を有する個人では、顕著な声帯周りの筋肉の緊張を伴い、音色も軋み音 (creaky voice) に近い。若い世代では、咽頭に舌根を接近させて狭めを形成する軽度な咽頭化音として現れる場合もある。いずれも母音の発出時間全体を通じてかかる特徴が維持され、咽頭化によって普通母音よりも舌位が下がり舌根が引かれてやや広く奥よりに調音される現象が観察できる。本稿では先行研究に倣い、母音に下線を付すことでこうした緊喉母音の音声的実現の諸相をカバーする音韻表記を採用した ¹⁶。

¹⁵ 黄布凡は、/ə/ [ə̥] と注記している。上で引用した項目 1 の説明を参照。この母音は地域差と個人差があり、その観察に基づいて記述する研究者により表記も異なる。/ɯ/ (池田／孙宏开)；/i/ (Conrad)；黄阳 (2023) は黄布凡に従う。

¹⁶ 鈴木 (2011) は、チベット=ビルマ諸語において「緊喉」と呼ばれる音声現象が多義的であることを調音音声学的に分析した。同論文にはムニャ語の Phungposhis (朋布西) 方言についての観察が含まれており、ムニャ語の先行研究において「緊喉」と呼ばれる現象が咽頭化と呼ばれる調音であることを論じている。発話協力者についての記載はないが、記述データを見るに若い世代の話者についての観察結果であろうと思われる。

問題は、この「+緊喉化」が、いったいどのような機能を有するのか、あるいは緊喉化を生じさせる動機づけはなにか、という点である。残念ながら現時点では、現象を記述することができるだけで、その現象が持つ意味を明らかにすることができない。ここでは暫定的に普通母音に「緊喉性」が加わることで、語を識別する一種のレジスターのようなものとして機能してきた、と考えておきたい。そして「緊喉性」が必ずしも伴わなくなった「緊喉由来母音」は、西部ムニャ語の音韻体系のなかで、いわば「二次派生母音」として定着したものと考えられる。

[a] は、南部地点の湯古村では、[Λ] と区別されない。少なくとも現時点では [Λ] との間で対立語例は見つかっていない。かといって自由変異ではないが、出現条件を明確に示すことは難しい。池田の観察では、アクセントの置かれた音節、あるいはイントネーションのかかった音節で、その語を明瞭に相手に伝えたいという意識が働く場合に現れるようである。このほかに、チベット語からの借用語にも現れることがある。地域的な差もあり、南部の湯古村では [Λ] で発音される語を、中部の生古村出身の発話協力者は、より広く奥よりの [a] で発音することが多かった。

/o/ については、緊喉化由来の母音 *[ɔ] が独立することなく普通母音の /o/ に合流したものと考えられる。

$$\begin{array}{ccccc} \text{普通母音} & & [+ \text{緊喉化}] & & \text{緊喉由来母音} \\ /o/ & \rightarrow & [o^{\text{f}} \sim \text{ɔ}] & > & [o] \end{array}$$

音声としては緊喉音由来と考えられる広めでやや緊張を伴った母音 [ɔ] が聞かれることがあるが、きわめて限定的である。中部地点の生古や六巴、沙徳周辺では、指示代名詞あるいは第三人称代名詞の第一音節に母音 [ɔ] が現れる。そのため、使用頻度の高い音のような印象があるけれども、語例は極めて少なく、いずれも /o/ の異音として処理できる¹⁷。

表 6 西部ムニャ語の各地点における代名詞の音形

北部地点 Pengbuxi 朋布西	中部地点 Shenggu 生古	南部地点 Tanggu 汤古	語義	
ʔe tsu	ʔe tsu	ʔΛ tsu	「これ」「彼／女」	近称
wu tsu	wɔ tsu	wΛ tsu	「あれ」「あの人」	遠称

¹⁷ このほか Liuba 六巴方言の /kaʔɔ/ 「以前に」；/χɔ/ 「どこ」といった語にも現れる。

4.4 緊喉母音と口蓋垂音

さきに 3. 口蓋垂音概観 で述べたように、黄布凡 (1985:62 / 2009:20) は、口蓋垂音の出現環境を緊喉母音と関連づけてその分布を明らかにした。

2. /β-v, k-q, k^h-q^h, g(-g), ŋ-n, x-χ, ɣ-ɣ/ などの 7 対の子音と普通／緊喉音¹⁸との分布には規則性が認められる。ペアとなる子音の前者は普通母音とのみ結合し、後者は緊喉母音とのみ結合する。ただし、ŋ と ɣ を除くと、すべての子音が o と結びつくことができ、しかも音声学的な特徴もはっきりしている。2 系列の音素として扱うこととした。

問題は、現在の西部ムニャ語の下位方言においては、黄布凡が指摘したような口蓋垂音と緊喉母音との整然とした分布状況はすでに崩れており明確ではない、ということである。つまり、口蓋垂音が聞こえたからといって後続する母音は必ず緊喉音であるとは限らない。それどころか、口蓋垂音と結びつくのは、黄布凡が整理した緊喉系列の母音群という限定的な結合関係は観察されず、後続して普通母音が現れる場合も少なくない。これはいったいどういうことであろうか。

4.5 緊喉音節の有標化と緊喉母音の衰退

西部ムニャ語において、緊喉母音の出現が不安定で再現性が低い、という現状が生じたのは、なぜだろうか。口蓋垂音と緊喉母音に関するこれまでの議論を踏まえて、その過程がどのように進行したのか、合理的な仮説を提示してみたい。ひとことで言えば、緊喉音節の有標性を維持するべく口蓋垂音と緊喉由来母音の音素化が促され、その進行とともに母音発出時に咽頭の緊張が付随するという発音特性が相対的に衰退していったものと考えられる。

- (1) 中舌～低母音では、咽頭が緊張するとともに、母音をやや低くかつ奥寄りに発音される傾向が見られた。そのため、/ɯ/ > [ə] ; /æ/ > [a] ; /e/ > [Λ] のような緊喉音由来の母音が発生した。
- (2) 同時に緊喉音の音節では、緊喉低母音のもとで、軟口蓋音から口蓋垂音の異音が生じ、軟口蓋音－普通母音；口蓋垂音－緊喉母音という組合せの分布が生じた。
- (3) 「緊喉性」が一種のレジスターのように機能してきたけれども、音節頭子音との分布状況が固定化されることで、頭子音が語の識別に用いられることによって、母音のレジスターが失われることになった。つまり口蓋垂音が音素化したために、母音の緊喉性が必須ではなくなり、普通母音 /æ, ɯ, e, o/ との組合せも可能となった。

¹⁸ 直訳すると「弛緩／緊張音」となるが、誤解を避けるために本稿で用いる用語に統一した。ムニャ語には呼気を伴うような音声学的な意味での弛緩母音はない。ここでは普通母音と緊喉母音の関係を指している。

軟口蓋音系列以外の音節初頭子音の場合には、中舌～低母音では喉頭の緊張が付随しなくても、緊喉音由来の二次派生母音との組合せであれば、緊喉音節であることがわかる。それに対して高母音では、緊喉音節であるためには喉頭の緊張が必須であったが、口蓋垂音と二次派生母音の音素化とともに、喉頭の緊張が失われる傾向が生まれ、この結果、現在では緊喉母音は痕跡的に不安定な現れかたをするようになったものと考えられる。

5. 口蓋垂摩擦音

西部ムニャ語には、無声および有声の軟口蓋摩擦音と口蓋垂摩擦音のペア /x-χ, ɣ-ʁ/ がある¹⁹。西部ムニャ語においては、前節で検討した閉鎖音や鼻音と同様に、無声音の /x-χ/ のペアも異音の関係にある。とはいえ、口蓋垂摩擦音の [χ] は出現が稀であり、上述した2種類の環境条件（唇音化と奥舌母音、あるいは緊喉母音）のもとで出現することを示唆する例は、[χwa⁵⁵se³³]（漢語の huāshēng ‘花生’ からの借用語）「ピーナツ」（TBL#0434）や [χə⁵⁵χə⁵⁵]「ゆるい」など、ごくわずかである。

むしろ、口蓋垂摩擦音 [χ] は、[χa ja] (WrT: *ha yang*)「アルミニウム」のように、語の音声に *ha* うを含むチベット語からの借用語に現れる²⁰ほか、/q^h/ の弱化形として現れることもある。例えば /ts^hɔ q^ha/ (WrT: *tshong khang*)「店」の自由変異として [ts^hɔ χa ~ ts^hɔ q^ha] が現れうる。また疑問詞の /ʔa dzu/「何」には、地点と個人により [ʔia dzu³³ ~ ʔha dzu ~ ʔχa zu] といった自由変異のバリエーションが聞かれる。中国語からの借用語の「靴」では、[xe ~ χe]（漢語 xié ‘鞋’）のように、[χ] が /x/ の異音でありながら、前舌母音との組合せで発音されることもある。このように、口蓋垂摩擦音 [χ] は、口蓋垂閉鎖音や口蓋垂鼻音とは違って、特定の語に固定して現れる音としてはやや不安定な印象があり、/x-χ/ の共時的な交替関係や出現条件も明白ではない。

5.1 有声口蓋垂摩擦音

有声の軟口蓋摩擦音 /ɣ-/ と口蓋垂摩擦音 /ʁ-/ は、軟口蓋音－口蓋垂音のペアの中で最も複雑である。これまで述べてきたペアとは異なり、/ɣ-ʁ/ は音声環境から単純に異音の関係にあるものとして説明することはできない。観察により記述するなら、確かに西部ムニャ語において /ɣ-/ は、原則として高母音または前母音の [i, æ, a, ø, u, u] とともに、いっぽうの /ʁ-/ は低母音または後舌母音 [e, o, a] のとの組合せにおいて出現するので、他の口蓋垂音と同様に、軟口蓋音と母音に

¹⁹ いっぽう、東部ムニャ語には、頻出しない軟口蓋音音素 /x/ がある。また、音声的には有声音 [ɣ] も聞かれるが、これは、3. 口蓋垂音概観で説明したように、軟口蓋閉鎖音 /g/ の異音である可能性が高い。

²⁰ [χa ja] は2音節目の [ja] < *yang* が、音節末の軟口蓋鼻音の影響で奥舌低母音化したことにより、前音節の母音がそれに同化して奥舌化し、口蓋垂音の出現条件となったのであろう。

関して相補分布を構成するように見える。

この両音は、東部ムニャ語においてどのような対応があるのだろうか。西部ムニャ語で有声口蓋垂摩擦音 /ɣ-/ を有する語から見ていくことにしよう。

次の表7を見ると、左側の西部ムニャ語で有声口蓋垂摩擦音 /ɣ-/ を有する語が、右側の東部ムニャ語では円唇半母音 /w-/ またはゼロ頭子音を有する語と対応していることがわかる²¹。

表7 西部ムニャ語の口蓋垂摩擦音と東部ムニャ語との対応

西部ムニャ語	東部ムニャ語	語義
ɣa lɔ / wu lɔ	a lo / wa lo	「頭」
ɣa mo	a mo / wa mo	「頭髮」
ɣa	a	「羊」
ɣa	æ	「ドア」
ɣa	wa	「針」
ɣa	ʼwa	「漢人」
ti- ɣa	to- wa	「発狂する」
tʰa- ɣa	tʰa- wa	「(酒に) 酔う」
ɣojy	wo / wa	「顔」
laɣo	lowo	「寺院」
-ɣo	-wo	「オスを示す接尾辞」
tʰi- ɣæ†	tʰu- wæ	「開く」
ɣu	wu	「草」

† tʰi⁵⁵- xuæ⁵³ (TBL#1633)

まず東部ムニャ語でゼロ子音となっている語について「頭」と「頭髮」の2語形を見ると、語頭において /w-/ が脱落し、ゼロになる交替形が派生したことがわかる。東西両部ムニャ語の対応関係から考えると、東部ムニャ語の「羊」や「ドア」も、同様に語頭の /w-/ が脱落して単母音音節化したものと推測できる。そうすると西部ムニャ語の口蓋垂音 /ɣ-/ は、東部ムニャ語における /w-/ に対応していると言えるだろう。

この状況は、さきに4.1 軟口蓋音の円唇化 で見た閉鎖音の対応関係に並行するように見える。

²¹ このほかに東部ムニャ語にはもうひとつ口蓋垂音と両唇音の対応が見られる。これはちょうど「遊牧民のチベット語」で [ɣgɔʷ] が [ɣgɔwɔ] から派生したように、口蓋垂音化した母音 /ɔʷ/ は、失われた -wo 接尾辞の存在を示している可能性がある。東部ムニャ語の形態論については別稿で論じたい。

* /kw-/	>	/q-/ ____ V [+tense/ +low]	(西部)
	>	/kw-/	(東部)
* /ɣw-/	>	/ɣ-/ ____ V [+tense/ +low]	(西部)
	>	/w-/	(東部)

いっぽう東部ムニャ語で /w-/ を有する語彙の中でも「開く」「草」の例では、東部ムニャ語の /w-/ に対して西部ムニャ語では有声軟口蓋摩擦音の /ɣ-/ が対応している。このことから、これらの語はおそらく、西部ムニャ語において非緊喉の高舌母音と前舌母音の前では、唇音化が作用しても口蓋垂音化が起きなかったことを示唆する。

東部ムニャ語で /w-/ を有する語には、表 7 の語例のように * /ɣw-/ (> * /ɣ^w-/) から派生したと考えられる音に対応する語群があるほか、次の表 8 の語例のように、もともと存在していたと考えられる語頭の * /w-/ あるいは * /v-/ からの反映など、いくつか来源の異なる音が合流している可能性を考慮する必要がある。

これに関連して、西部ムニャ語の側には /w-/ に始まる語彙項目がほとんどないという事実は重要である。5,000 語以上のサンプルのうち、語頭に /w-/ を含む単語はわずか 20 語程度にすぎず、そのうち借用語ではなく確実に固有語だと断定できる語根は 10 語に満たない。その理由として考えられるのは、この言語の歴史のある時点で * /w-/ と * /v-/ との間で混乱が生じた可能性である。下の表 8 に示す対応状況からは、両言語が共有する歴史のある時点で * /w-/ が * /v-/ と混同されたり、入れ替わったりしたのではないかと想像される²²。

表 8 西部ムニャ語と東部ムニャ語における w-v の対応

西部ムニャ語	東部ムニャ語	語義
wi	vi	「酒」
wλ	vi	「ロープ」
væ vu	wæ wu	「おじいちゃん」(父方)
vu mλ	wu mi	「母豚」
ts ^h u vu	ts ^h u wu	「斧」
(w)u zu	vi zi	「鳥」
ɣ(w)a	vi tsa	「肩」

²² * /w-/ と * /v-/ のいずれかが借用語とともに入ってきて、音韻体系に混乱をもたらした可能性がある。また黄布凡 (1985:62 / 2009:20) では軟口蓋音と口蓋垂音のペアと同列に唇音の /β-v/ を置き、前者は普通母音と、後者は緊喉母音と結合する、としているが、現代の西部ムニャ語の各地点、特に中央から北の地点では、こうしたペアを見出すのは難しい。

5.2 由来の異なる有声軟口蓋摩擦音

つぎに, 唇音化の作用を受けなかった軟口蓋摩擦音 */ɣ-/ は, 東西両部のムニャ語に継承されるにあたり, どのように変化したのか, あるいは変化しなかったのかを見ておこう。

ここで再確認しておくべき重要な事実は, 東部ムニャ語には, 軟口蓋摩擦音 */ɣ-/ が, 音素としては存在していないということである。西部ムニャ語で普遍的に見られる音素の /ɣ-/ を有する語に対応する東部ムニャ語の語彙を見ていくと, 一部は表7に挙げた語例のように /w-/ が対応するほか, 表9のように /z-/ が対応する語も少数見られる。しかし, 大勢を占めるのは意外にも歯茎閉鎖音 /d-/ を有する語であり, しかもその多くが, 西部ムニャ語において実はいずれも */r-/ から派生した音であることがわかる。

表9 西部ムニャ語と東部ムニャ語における ɣ-d の対応

西部ムニャ語	東部ムニャ語	語義
ɣu ɣu	ti-zi [v]	「重い」
ɣi ɣi	zu zu	「軽い」
ɣũ ndu	zi ndi	「手紙, 本」*
ɣV-	dV-	方向接辞 (上流へ)
ɣi / ri	di	「手」**
ɣ ^(w) i ɣ ^(w) i / ri ri	di di	「厚い」
ɣe ɣe / re re	di	「おいしい」
rʌ	dæ væ	「舌」
ru	di	「土地」
rʌ tsʰi	di tsʰi	「蚤」
ro ʁa	di va	「青羊」
ri mbi tɕø	du	「竹」
so ʁo / sɔ ʁo	so do	「砥石」***
ri li	di li	「4」

* 東部ムニャ語の語形 *zi ndi* は, 動詞語幹「書く」+ 名詞接尾辞という語構成の可能性がある。動詞 (*kʰi-*) *zi* 「書く」(*kʰi-* は方向接辞) と比較されたい。とすると, 西部ムニャ語の語形 *ɣũ ndu* も, 動詞語幹「学ぶ」+ 名詞接尾辞という語構成に由来する可能性を指摘し得る。動詞 (*kʰi-*) *ri* 「学ぶ」(*kʰi-* は方向接辞) と比較されたい。ただし, 西部ムニャ語において /ndu/ はもはや生産的に機能する接尾辞ではない。

** 関連語: *rʌ dʒi* 「手のひら」; *ru ru* 「上腕」; *ra ndza* 「(爪のある) 動物の足」

*** この語は対応関係にあるか否かの判断が難しい。第一音節の *so* は, 東西両部ムニャ語で「研ぐ」という動詞語幹形態素であるが, 東部ムニャ語の第二音節の *do* はチベット語の「石」*rdo* に由来する可能性がある。

西部ムニャ語の湯古方言では、「手」には /ɣi/ ~ /ri/ の交替形があり、前者は /ɣwi/ 「馬」と円唇化の有無で区別される。同様の区別は「厚い」にも見られ /ɣwi ɣwi / ~ /ri ri/ の交替形があり、前者は /ɣi ɣi/ 「軽い」と円唇化の有無で区別される。円唇化の渡音がない生古方言では、「手」は /ri/ で、/ɣi/ 「馬」と区別され、「厚い」は /ri ri/ で /ɣi ɣi/ 「軽い」と区別される。このようにそれぞれの方言地点で語の区別を保つように音韻体系の再編が行われているが、注目すべきは /ɣ-/ の一部に */r-/ に由来する音が含まれていることである²³。

表 10 [r]~[ɣ] の交替と分布

第1段階		第2段階 湯古方言		第3段階 生古方言	語義
ri		ri [~ɣi]	>	ri	「手」「厚い」
*r ^w i	>	ɣwi	>	ɣi	「馬」

次に東部方言の対応に目を移すと、西部ムニャ語で語頭に /r-/ または /r-/ から派生した有声軟口蓋摩擦音 /ɣ-/ を有する語形は、東部ムニャ語では歯茎閉鎖音（語頭では前鼻音化された）/d-/ を有する語形に対応している。

ここで我々は、何らかの子音 (*C) がこれら全ての音に発展したと仮定して考えてみたい：*C → r-/ɣ- (西部) : d- (東部)。前述のように、西部ムニャ語の有声軟口蓋摩擦音 /ɣ-/ [の一部] は /r-/ から生じた異音であり、西部ムニャ語における /r-/ 音は、接近音 [ɹ] のほかに、反り舌音 [ɻ] などの音声的バリエーションがある。しかし、対応する東部ムニャ語の /d-/ が歯茎音であることから考えると、両言語に分岐する前段階では、*/r-/ [r- ~ ɹ-] のように、震え音あるいは弾き音であった蓋然性がある。

同時に、西部ムニャ語において /ɣ-B/ が、共時的には異音の関係にあると帰納される場合であっても、その歴史的な由来を考えるなら、我々は口蓋垂閉鎖音や鼻音について議論してきたのとはまったく異なる状況を見ているのではないだろうか。

確かに西部ムニャ語の /ɣ-B/ のペアの場合には、[B] は /ɣ-/ の異音であり、その出現は緊喉母音によって条件づけられているかのような様相を呈する。しかし、東西両部ムニャ語の対応関係からその歴史的来源を検討すると、口蓋垂音の /B-/ はすべて単純に /ɣ-/ から二次的に派生した音であると言い難く、さらに遡るとその一部は早い時期からすでに口蓋垂音として存在していた可能性がある。

²³ この変化の過程については、Ikeda (2004) が「馬」の語形を取り上げてその変化の過程について論じており、あわせて「馬」を指す語 /ɣwi/ (< */rwi/) と、複合語中で「馬」を示す形態素 /ra/ との間で母音交替の関係があり、それが西夏語の「馬」を指す語と、複合語における構成成分との関係に並行することを考証している。

ここまでの議論を整理して提示するなら、次のようになる。

		西部	東部
$*\gamma^w-$	>	$\gamma^w-/B-$	$w-$
$*\gamma-$	>	$\gamma-$	$z-$ (少数)
$*r-$	>	$r- (\sim \gamma-)$	$d-$

注意すべきは、この体系のなかでは $*/rw-/$ という組合せが想定されておらず、検討項目の欠落部分となっていることである。東西両部ムニャ語が分岐する以前の段階で、 $*/r-/$ にも円唇化が作用していたのなら、東西両部方言の対応から遡って想定される体系の中で、なぜそこだけが欠落しているのか。その理由は体系上 $*/rw-/$ の位置を占めるべき音は、早い段階で $*/B^w-/$ に変化していて、のちに $*/\gamma^w-/$ に合流したからではないだろうか。

			西部	東部	
$(*r^{w-})$	>	$*B^{w-}$	>	$B-$	$w-$

ただしこれは内的再構の手法により想定され得る体系上の均衡から導かれた仮説であって、何らかの痕跡が継承されていなければ、この変化を辿ったのがどの語であったのかを実証的に特定するのは困難である。

5.3 PTB との対応から

東西両部ムニャ語において、軟口蓋音と口蓋垂音の対応が整備される方向で音韻体系の再編が発生する前からすでに口蓋垂摩擦音が存在していた可能性を示唆するデータはあるのだろうか。

表 11 は、チベット=ビルマ諸語の基礎語彙から、西部ムニャ語で語頭に $/B-/$ を有する語を抽出して、推定される祖型と対照させたものである²⁴。

²⁴ チベット=ビルマ語の基礎語彙は、Matisoff (1978: 284–296) Appendix I の The Matisoff 200-word list [CALMSEA: Culturally and Linguistically Meaningful for Southeast Asia] に基づく。またチベット=ビルマ祖語の再構形 (PTB: Proto-Tibeto-Burman) は、基本的に Benedict (1972) による。

表 11 西部ムニャ語と東部ムニャ語における $\text{Ɂ} - \varnothing$ の対応と PTB

PTB	西部ムニャ語	東部ムニャ語	語義	CalmSea
*s-kra (STC#115)	Ɂa mo	(w)a ma	「頭髮」	CS#010
*s-gaw (STC#490)	Ɂa lɔ	(w)a lo	「頭」	CS#013
*ke (STC#251) cf. <i>ske</i> (WrT)	Ɂə tsa	zu mbu	「首」	CS#018
*ɲya (STC#189)	Ɂ(w)ə	vu	「魚」	CS#055
*k-rap (PLB: TSR#191)	Ɂɛ	wa	「針」	CS#104
*bay (STC#047) cf. <i>g-yon pa</i> (WrT)	Ɂɛ re	vu zu	「左」	CS#110
*(m)-kul (STC#397)	nu Ɂa	no (fi)a	「20」	CS#115
*kruw (STC#117)	na- Ɂo	nu-/ni- wa	「洗う」	CS#185

このように西部ムニャ語で語頭に $/\text{Ɂ}/$ を有する語は、基礎語彙の中に数多く安定的に存在している。これらの語はいずれも東西両部ムニャ語が分岐する以前の段階から有声口蓋垂摩擦音 $*/\text{Ɂ}^w/$ を有していて、西部方言はそれを継承し、東部方言では弱化して $w-$ に変化した、と考えることができるだろう。そのうえで、さらに遡って PTB の再構形と対照させてみると、西部ムニャ語で語頭に $/\text{Ɂ}^w/$ を有する語は PTB の $*\text{kr-}$ あるいは $*\text{sk-}$ ($\rightarrow *rg-$) に由来する可能性があることがわかる。その対応関係は整然としたものではないけれども、再構形の語頭の多くは「軟口蓋音 + α の複合子音で、前接辞あるいは介音に s/r を含む」ことが注目される。この s/r 音要素が摩擦音化する作用を担ったのではないだろうか。

東西両部ムニャ語が分岐する以前の段階で、すでに口蓋垂摩擦音 $/\text{Ɂ}^w/$ が存在していたと仮定するなら、上の推定で体系上の欠けとなっていた $*/\text{rw-}/$ の位置を占めるはずの音は、口蓋垂摩擦音の $*/\text{Ɂ}^w/$ に合流して存在していたと推定できる。このほかにも現代語の口蓋垂音の中にも、軟口蓋音から二次的に派生したのではなく、早い段階から口蓋垂音として存在していたことを示唆する語例がいくつかあり、たとえば *fia- qɔ* (西部; WrT: *rko*) 「掘る」などは、無声閉鎖音の一例として指摘できるだろう²⁵。ただし、Benedict-Matisoff による PTB の再構形では、口蓋垂音を再構することには慎重である。*tə- qʰa* (西部) 「苦い (味がする) [動詞]」のように、羌語支のみならず彝語支でも広く安定して口蓋垂音が聞かれる「苦い」という語でも、PTB の再構形は $*\text{ka}$ (STC#008) となっている。西南中国のチベット = ビルマ諸語に広く見られる口蓋垂音が、いつからどのように継

²⁵ *fia- qɔ* 「掘る」の *fia-* は方向前接辞で「下流へ」向かう動作であることを示す。たとえば坑道を横に掘り進むような場合には *yw-* 「上流へ」に置き換えられる。PTB の再構形は $*\text{kaw}$ (STC#269), $*\text{r-ko-t}$ (STC#420) であり、東部ムニャ語での反映形は *tu-kwe kwe* である。

承されてきたのかは、個別の言語あるいは言語群ごとにさらに実証的な研究が必要である²⁶。

推定される祖型と現代語の間に起こった音の変化に関するこの議論に関連して最後に付け加えておくべき点を挙げておきたい。東部ムニャ語では（近年に生じた現象として）*l-/r-*の統合が行われたようである。東部ムニャ語の最東端の下位方言には */r-/* は見られず、最西端の下位方言では、*/r-/* 音素が失われつつある。この音変化は、九龍県で話されている Hongba 洪巴方言では世代差として見られる。この方言では、年配の話者が */r-/* を発音するのに対し、若い話者は */l-/* に近い発音をする。また *li tci* (WrT: *ral gri*) 「ナイフ」や *le ku* (WrT: *ras skud*) 「ひも」など、*/r-/* の出現が期待されるチベット＝ビルマ祖語由来の語にも */l-/* が現れる単語がいくつかある。この合併により *yi* (西部) *lu* (東部) 「馬」；*ro* (西部) *lo* (東部) 「蛇」のような語形が形成されたことを説明づけることができる。これらの語は、東部ムニャ語の側面音の */l/* が、西部ムニャ語の口蓋垂音、軟口蓋摩擦音（もしくは */r/*）に対応しているかのような状況を示しているが、いずれも祖形は **/r-/* に遡るものであり、東部ムニャ語において発生した *l-/r-* の統合傾向により生じた対応関係である²⁷。

6. 結論

黄布凡（1991:230–235 / 2003:194–198）は、羌語支諸語に広くみられる口蓋垂音の語例の対応関係を調査して、羌語支という言語グループが形成される以前から口蓋垂音が存在していたのかどうかという問題を提起した。羌語支諸語が口蓋垂音を有する同源語を共有するのみならず、羌語支 (Qiangic)・藏語支 (Tibetan)・彝語支 (Lolo) の異なる語支にわたり、借用関係は想定できないほどに隔絶した分布を示す言語にも対応する口蓋垂音が聞かれることから、この音がチベット＝ビルマ祖語にまで遡る可能性を示唆している。黄布凡は、チベット文字の成立以前に存在していた調音位置の異なる軟口蓋音 **[g]* と口蓋垂音 **[g]* の両者がひとつの正書法記号 ㄅ の下で区別されなかった可能性があり、後に語音が無声化または摩擦音化したことで、軟口蓋音 **[g]* が *[ɣ]* に、口蓋垂音 **[g]* が *[ʁ]* にそれぞれ変化したのではないかという考えを提出している。しかし同時に黄布凡は、羌語支諸語の起源には口蓋垂閉鎖音と鼻音が存在していたが、歴史的に有声口蓋

²⁶ たとえば、Chirkova (2008) は、ムニャ語の南部に隣接して分布する羌語支のリズ (Lizu/Lüsu) 語とアルス (Ersu) 語の比較から、Lizu 語の口蓋垂音の起源として *[q] < [qʰ] < /kr/* のように軟口蓋閉鎖音と介音 *-r-* の組合せを推定し、同様に *[ʁ]* も */xr/* に由来する可能性を示唆している。また彝語支の歴史における口蓋垂音については、盖兴之、姜竹仪 (1992) が検証している。この論考ではロロ祖語の段階で口蓋垂音が再建されており、現代語の軟口蓋音はそこから発展して出てきた、と考証する。

²⁷ いっぽう、東西両部ムニャ語が分岐する以前からの **/l-/* が両部方言それぞれに継承された語例には、*le nə* (西部) *lu ve* (東部) 「月」；*tho- la* (西部) *tho- lo* (東部) 「放す」；*qho- la* (西部) *kho- lo* (東部) 「射る」などがある。

垂摩擦音が存在した証拠はない、とも述べている。

本稿の結論は、黄布凡の考えを補完するものである。東西両部ムニャ語において口蓋垂音の現れる音声環境を分析し、両方言間の同源語の対応関係を明らかにして、東西両部ムニャ語が分岐する以前の段階において口蓋垂音が存在したと推定し得るか否かを検証した。その結果、東西両部ムニャ語が分岐する以前の段階から口蓋垂摩擦音 *[ɣ] が存在していたことは十分に想定が可能であり、それはさらに遡った PTB の再構形で *kr- あるいは *sk- (> *rg-) に由来する可能性があることもあわせて指摘した。ムニャ語の口蓋垂音は、有声摩擦音同様に古い段階から継承されてきたものに加えて、東西両部に分岐したのち、緊喉母音、低母音+唇音化といった音声環境のもとで軟口蓋音と口蓋垂音との間での対応関係と分布が体系化される方向に再編されたと考えられる。

ただし、現代のムニャ語において口蓋垂音を有する語のうちのいずれが古い段階から存在していた音を継承したものであるかは、他の羌系諸語との対応関係を参考にしつつ、言語の内部における音韻交替と形態論、および方言間のバリエーションを精査してさらに探求を進める必要があり、それは関連する周辺諸語においても同様である。

我々は現代ムニャ語の音韻体系のなかで「口蓋垂音は軟口蓋音から派生した異音であろう」という予測と方向性のもとでの記述の妥当性を検討することから出発して議論を進めてきたが、結果としてムニャ語の歴史の早い段階から口蓋垂音の一部はすでに音声として存在していたと仮定することが十分に可能であるという結論に達した。だとすると、早期のムニャ語が東西両方言に分岐したのち、それぞれの音韻体系が変化して再編されていくなかで、西部ムニャ語では音素化する方向で口蓋垂音が継承されたが、東部ムニャ語においては軟口蓋音の系列に組み込まれていき、やがて失われたと考えることができる。そして口蓋垂音を失った東部ムニャ語は、羌語支諸語のなかでも相対的に「より進化した」言語であるという位置付けになる。

参考文献

[欧文]

Bai Junwei

- 2019 *A grammar of Munya*. (PhD Thesis), James Cook University.
 2021 Northern and Southern Munya Dialects: Towards a Historical Perspective. *Studia Linguistica* 75(2), pp. 328–344.

Benedict, Paul K.

- 1972 *Sino-Tibetan: A Conspectus*. Contributing editor: James A. Matisoff. Cambridge: Cambridge University Press.

Chirkova, Ekaterina

- 2008 Essential characteristics of Lizu, a Qiangic language of Western Sichuan. Paper presented for Workshop on Tibeto-Burman Languages of Sichuan, November 21–24, 2008 at Institute of Linguistics, Academia Sinica, Taipei.

Coblin, W. South

- 1986 *A Sinologist's Handlist of Sino-Tibetan Lexical Comparisons*. Monumenta Serica Monograph Series 18. Nettetal: Steyler Verlag.

Gao Yang

- 2015 *Description de la langue menya: Phonologie et syntaxe*. Paris: Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales. (Thèse de doctorat.)

Ikeda Takumi (池田 巧)

- 2002 On pitch accent in the Mu-nya language. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*. 25.2. pp. 27–45.
 2004 The Mu-nya language and the Tangut language: Some problems in their comparison. 《漢藏語研究：龔煌城先生七秩壽慶論文集》台北：中央研究院語言學研究所。

Matisoff, James A.

- 1978 *Variational Semantics in Tibeto-Burman: the 'organic approach' to linguistic comparison*. Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues.

Wylie, Turrell

- 1959 A Standard System of Tibetan Transcription. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 22, pp. 261–267.

[中文]

《藏緬語語音和詞匯》編寫組

- 1991 《藏緬語語音和詞匯》*Zang-Mian yu Yuyin he Cihui*. 北京：中國社會科學出版社。

池田巧 (IKEDA Takumi)

- 1998 木雅語語音結構的幾個問題. 中央ユーラシア学研究会『内陸アジア言語の研究』第 XIII 号. 83–91 頁。

戴庆厦

- 1991 《藏緬語十五種》北京燕山出版社。(重載黃布凡 1985)

蓋興之, 姜竹儀

- 1992 彝語支語言的小舌音. 《彝語研究》編委會 (編)《彝語研究》成都：四川民族出版社. 76–92 頁。

黃布凡

- 1985 木雅語概況. 《民族語文》1985.3. 62–77 頁。
 1991 羌語支. 馬學良 (主編) 1991[2003]《漢藏語概論》藏緬語篇, 第三章。
 2009 《川西藏區的语言》北京：中國藏學出版社。(重載黃布凡 1985)

黄布凡（主编）

1992 《藏缅语族语言词汇》[*A Tibeto-Burman Lexicon*.] 中央民族学院出版社.

黄阳

2023 《沙德木雅语参考语法》北京：中国社会科学出版社.

马学良（主编）

1991 《汉藏语概论》上下，北京：北京大学出版社.

2003 《汉藏语概论》第二版，北京：民族出版社。（收载黄布凡 1991）

孙宏开

1991 《藏缅语语音和词汇》第一部分 导论. 北京：中国社会科学出版社.

1983 六江流域的民族语言及其系属分类—兼述嘉陵江上游，雅鲁藏布江流域的民族语言. 《民族学报》1983.3. 云南民族出版社. 99-273 页.

2013 《八江流域的藏缅语》北京：中国社会科学出版社.

2016 《藏缅语族羌语支研究》北京：中国社会科学出版社.

孙宏开等主编

2017 《汉藏语语音和词汇》上／下，北京：民族出版社.

刘楚龙、黄腾宇

2023 蟹螺乡木雅语语言概况. 赵丽明（主编）2023 上，37-109 页.

张琰、刘楚龙、黄腾宇

2023 木雅语东西部方言语音特点初步对比. 赵丽明（主编）2023 下，1183-1189 页.

赵丽明（主编）

2023 《海螺木雅藏族濒危文献整理与解读》上／下，成都：西南交通大学出版社.

[日本語]

鈴木博之

2011 チベット・ビルマ系言語から見た「緊喉母音」の多義性とその実態『言語研究』140, 147-158 頁.

早田輝洋

1999 『音調のタイポロジー』東京：大修館書店.